

読書の初発衝動

奈良 敏行（笈の定有）

「初発衝動」という言葉をわたしは日頃好んで使う。行為の起点となり、そこに発生している強度の感情や欲求、動機のことだ。自分を押し上げる何ものかなのだが、うまく意識されえない。しかしそれは執拗に反復してやまない。意識下に固着して離れることのない固定観念であり、わたしはそれをオブセクションと呼ぶ。良きにつけ悪きにつけわたしをどこか遠くへ連れて行く根源的な欲動だ。

かつて「毀損」という言葉を好んで使っていた。それは想念につり合う行為を見出だせない、というジレンマに起因していた。

《心優しいばかりにいまでは生活というものがない》
（ランボオ）

ランボオの毀損の言葉だが、少し逆説的な言葉だ。想念がいつもありきたりの行為に譲歩しつづけ、それ故にこの

世に居場所を失っていくという愁嘆だ。

はじめにあったのは桎梏だ。敗北を予感した者は言葉という象徴世界へ離脱する。いつか帰還するという夢を心に秘めながら……。本を読むということについて次のような理路を考えたことがある

《本は「驚き」によって世界（存在）を開く、それは環境緊縛性から世界開示性への開かれでもあり、ときにそれが「自由」の体験であり、また「救い」でもある。》

これは本を読み続けてきた果ての「驚き」と「喜び」の言葉である。ここには二つの結論が語られている。本を読み続ける果てに量が質に変わり緊縛（桎梏）から解き放たれ、外部への視野が開け、世界の中に立つことができる。自分を開いていく動きがそこにある。二つ目は、この開かれた世界の中で自分的な自由を体験し、そのことを「救い」と認識していく過程がある。そして翻って自分を閉じていく。緊縛し続けた環境とは何であつたのか解き明かしていくとする。

初発衝動というのは個人的な衝動だ。外部へ逸脱しようとするエネルギーだ。壁に脱出口を開けられれば、そこから世界は相貌を変えていく。そのようにして日常世界は更新されていく。毀損しなければ、だ。必要なのは想定外の強度だ。

読書の初発衝動は一人一人違う。しかし本を読むということへの体験は、象徴世界（言葉の世界）を信じるという不動の地位にある。想念と行為のずれ（差異）、これが本を読み続けるということの秘密なのかもしれない。いずれどちらかに掛札を張ることとなる。

疑団という言葉がある。心の中にしこりになっている疑いの塊のことだ。疑惑といえは思いまどうことだが、疑団は迷いではない。人間には解けない謎があるという確信の存在を意味する。

人間には、我々はどこから来たのか、我々は何ものか、我々はどこへ行くのか、というゴーギャン由来の疑団がある。本を読み続けるには人それぞれ様々な動機がある。でも日常の穴ぼこに落ち込んだ人は、宇と宙の広漠さ、人間的時間のあまりの短さ、そして狭さ、見えているものは本当の世界なのだろうか。そんな、どこまでもとどまることのない疑団を抱え込んで、心休まるときがない。

本を読み続けて、結局答えは出ないのだが、誰でもが同じように物事を見、そして考えているということに気づくようになる。いくら本を読んでも実存することの不可思議の謎は解けないのだが、長く生きて多くの実存の生成消滅を見てみると、謎は解けないが、疑団氷解のときがくる。

氷解とは答えが見つかるということではない。答えを必

要としなくなることである。疑団は目的へ至るものではない。もともと目的あってここにいるわけでもない。分らないということにも尊さがあるのかもしれない。本を読み続ける。しかし読めば読むほど分らないことが増える。読書とは、いつまでも疑団を踏み分けて、歩み続けることなのかもしれない。

2025.07.15